令和６年度

研究紀要

秋田県立由利高等学校

学びの宝石箱

校　長　熊谷禎子

本校における「研究紀要」は校内で行われた教育実践の記録である。学会誌や学術誌と比較すると、特定の学問分野に固定されることなく、自由に自らの実践を公表し、他からもオープンアクセスしやすいことから、評価が得られやすいと感じる。今年度の内容は、若手教員が取り組んだ授業実践研修の報告、由利高校の特色ある教育活動の柱である理数科と国際科の取組に関するレポート、教科（国語）自主研究である。中でも新採用教員にとっての１年間の授業研修は、文科省で示されている資質・能力の３つの柱に基づき、所属校の生徒の実態を踏まえた「学びの構想」との格闘であったと想像する。進路多様校である本校では、キャリア教育の充実と、社会で生きて働く探究力を重視しているが、生徒が主体的かつ継続的に学ぶようになるためには、「学び」が自己肯定や自己拡張になるという生徒自身の実感が不可欠だと考える。１コマ４５分という限られた時間で、いかに生徒の「学ぶ力」を引き出し、「思考力」を育てるか、教師の粘り強い創意工夫が必要となる。

昨年５月に発表された、中教審審議のまとめ「『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための整備計画に関する総合的な方策について」によると、全ての子どもたちのより良い教育の実現を目指して、教育の質の向上を図るために３つのことがあげられている。①学校における働き方改革の更なる加速化、②学校の指導・運営体制の充実、③教師の処遇改善である。学校の抱える課題が複雑化・困難化の現状にあっても、学校は「学びを通して人が成長する」場であるからこそ、教育の質の向上と教師が子どもと向き合う時間の確保と充実は、何よりも優先すべきことだと思う。そして「研究紀要」から、本校が目指す学校教育への関心が高まり、個々の教員にとっての課題認識が深まり、課題解決のための新たな挑戦が始まることを期待する。

今年度の共通テストは、複数の資料を用いて思考力や判断力を試す設問がさらに多くなったという印象である。「歴史総合、日本史探究」では、作家の松本清張の小説や新聞記事と、長谷川町子の漫画が資料として示され、時代背景などが問われた。また「情報Ｉ」は、大手予備校の速報解説によると、「学校生活、日常生活において問題を発見し、解決する思考力や判断力が求められる問題が中心であった。正しい知識を身に付けることに加え、それを普段の生活の中で活用する力が必要となる」とあった。多様性の時代は、絶対的正解のない時代である故に自分で正解を導く力が求められる。学校は、自ら考え抜く知的体力と、他者の考えを受容し共創を楽しむ柔軟性を育む場であり、それは、生徒のみならず、教員にも言えることである。

昨年暮れに「人生フルーツ」というドキュメンタリー映画（2017 年公開・リバイバル上映）を見た。90 歳の建築家・津端修一さんと 87 歳の妻・英子さんは、たがいの名を「さん付け」で呼び合い、老後の暮らしぶりは、細やかな気遣いと工夫に満ちている。２人が住む雑木林に囲まれた一軒の平屋は、師であるアントニン・レーモンドの自邸に倣って建てた家である。自ら育てた雑木林は里山の風景を甦らせ、四季折々にキッチンガーデンを彩る 70 種の野菜と 50 種の果実が生活に潤いを与えている。作中で繰り返される「家は、暮らしの宝石箱でなくてはいけない」は、モダニズムの巨匠ル・コルビュジエの言葉である。教育改革の加速に伴う教師側のアップデートを適宜コントロールしつつ、生徒と向き合い、自らも成長することができる学校は、「学びの宝石箱」であると私は思う。

目　　次

巻頭言

校　長　　熊谷　禎子

1　研修報告

「実践的指導力向上研修講座（高等学校２年目）」　蛯川　涼香

「実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）」　丸井　柊都

「初任者研修講座」　佐藤　好貴

「初任者研修講座」　加賀谷　健

2　研究・実践記録

今年度理数科の取組

理数科運営委員会　加藤　奈保子

今年度国際科の取組

国際科運営委員会　笹渕　夏子

『宋史』列伝　劉温叟における「温」

国語科　坂本　公正

1　研修報告

- 「実践的指導力向上研修講座（高等学校2年目）」
- 「実践的指導力向上研修講座（高等学校2年目）」
- 「初任者研修講座」
- 「初任者研修講座」

令和６年度　講座番号Ａ－７

「　実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）　」を受講して

期　　日　：＜Ⅰ期＞令和６年５月１７日（金）
　　＜Ⅱ期＞令和６年９月１３日（金）
場　　所　：　秋田県総合教育センター
氏　　名　：　虻　川　涼　香

研修の目標

学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

受講内容

Ⅰ期
10:10~11:40　保護者対応と連携
11:45~11:55　社会に開かれた教育課程の実現に向けて
12:55~14:05　学校組織の一員として―学校教育目標とホームルーム経営―
14:15~16:05　授業づくりの充実に向けて①
Ⅱ期
10:10~16:05　授業づくりの充実に向けて

受講のまとめ

本年度から担任を持ち始め、昨年度初任研から学んだことを実践していくことになった。また、研修でもより実践的な内容を学ぶことができた。

Ⅰ期では、保護者対応やホームルーム経営について学んだ。初めての担任で日頃悩んでいることを実際の場面を想定しながら具体的に学ぶことができた。特に「学校組織の一員として」の意識が自分には足りていなかったことが分かった。学校教育目標をもう一度見つめ、目指す生徒の姿を意識しながらホームルーム経営や授業づくりに励んでいきたいと思った。

Ⅱ期では、同じ教科の先生方と自分の授業のビデオを見せ合い、意見交換を行った。他校の授業の様子を見ることはとても参考になり、自校だったらどのような授業展開がよいだろうか、どのような評価計画にしたらよいのだろうかと考えながら授業を拝見した。他の先生方と共に授業の改善点を話し合うことで自分では思いつかなかったような授業法や考えと出会えて非常に勉強になった一日であった。

また、校内研修でも学びが得られた。一般研修では昨年よりも実践的な場面を想定しながら学ぶことができた。教科研修では主にⅡ期での授業に向けて単元計画や指導案の作成を行った。国語科の先生からアドバイスをいただき、身に付けたい力を意識しながら計画を立てることの大切さを学んだ。

初めて担任を持ち始め、自分に足りていない力や知識を痛感する１年であった。初任研や本研修で学んだことを何度も繰り返し確認して、良い教師になれるようにこれからも努力し続けたい。

令和６年度　講座番号Ａ－７

「　実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）　」を受講して

期　　日　：＜Ⅰ期＞令和６年５月１７日（金）
　　＜Ⅱ期＞令和６年９月１３日（金）
場　　所　：　秋田県総合教育センター
氏　　名　：　丸　井　柊　都

研修の目標

学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

受講内容

Ⅰ期
10:10~11:40　保護者対応と連携
11:45~11:55　社会に開かれた教育課程の実現に向けて
12:55~14:05　学校組織の一員として―学校教育目標とホームルーム経営―
14:15~16:05　授業づくりの充実に向けて①
Ⅱ期
10:10~16:05　授業づくりの充実に向けて

受講のまとめ

本研修では、教師としての基本的業務についてさらに実践的な内容を学んでいった。特にクラス担任としての実践的指導の手法を講義やロールプレイを通して学んでいった。

Ⅰ期では、保護者対応や学校・クラス経営についての内容を扱った。ここでは受講者同士でペアを組んで、実際の対応の練習とその振り返りを行った。また、他の受講者の先生方も実際に様々な体験をしており、それらを共有することで、自分の中で保護者対応のイメージをさらに膨らませることができた。加えて、実際の学校教育目標を活用してホームルームの目標を立てるという活動も行った。学校教育目標をよく読み込むと、学校独自で目指しているものや地域性を生かした内容があり、それらを理解することは学校の強みを生かすことに繋がると学んだ。本研修で学んだことを生かして、信頼を得られる対応とオリジナリティのあるクラス経営を目指していきたい。

Ⅱ期では、授業のビデオを見せ合ってフィードバックを行った。自分の授業では、自分では考えられなかった視点からの意見をいただき、今後のための収穫となった。また、他校の授業の教材や雰囲気をみて、自分ならどのような授業を展開するか、イメージを膨らませることも非常に勉強になった。今後も授業第一で日々改善を図ることを目標としていきたい。

今回の研修を通じて、学校組織の一員としての役割を再認識するとともに、ホームルーム経営や保護者対応における実践的な知識とスキルを学ぶことができた。これからもさまざまな「目標」を軸に自らの指導を省みて、生徒一人ひとりの成長を支える取り組みを続けていきたい。

令和６年度　講座番号　Ａ－３

「初任者研修講座（高等学校）」を受講して

氏　　名　：　佐藤　好貴

研修の目標

教員としての心構えを身につけるとともに、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての基礎的・基本的な指導力を養う。

受講内容

[総合教育センター主催]
・初任者研修講座：教科等指導力、マネジメント能力、生徒指導力、教育課題への対応
[高校教育課主催]
・PA 研修：プロジェクトアドベンチャー体験、協議
・生徒理解（秋田明徳館高等学校）：授業参観、秋田明徳館高等学校長講話
・特別支援学校訪問：授業参観、授業体験、教育専門監講話

受講のまとめ

総合教育センターでの研修では、教科等指導力についての研修だけでなく、マネジメント能力や生徒指導力等の研修など多岐にわたって教員としての基礎的・基本的な指導力を養うことができた。教科指導力についての研修では、中学校との関連を踏まえた授業づくりや「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業づくりについて深く学び、早速普段の授業に取り入れて実践することができた。学習指導要領に基づいた教科指導について理解を深めることもできた。また、授業実践研修では、総合教育センターの田口指導主事や本校の理科教員の方々から多くのご意見と激励をいただき、今後の授業改善に役立てていきたい。

また、高校教育課の研修では、秋田明徳館や特別支援学校への学校訪問で多様な生徒への理解、特別な支援を要する生徒への理解が深まった。生活スタイルや学びのスタイルも多様化してきており、そういった状況でも生徒が自ら学ぶ事ができるように、教員として様々な工夫を凝らしていきたい。今年度から宿泊 PA 研修も復活し、体験的な活動を通して集団を作っていく体験ができた。学級経営や集団を動かす時に大いに役立つ研修であった。

校内研修においては、本校の先生方にご協力いただき、本校についてだけでなく様々な経験から来る知見を教えていただき、今後の教員生活の糧となる研修をしていただいた。普段の業務で必要な知識や技能について学ぶことができ、研修の内容は実践を通して深めていきたい。進路指導や生徒指導、特別活動など、研修を通して新たに知ることも多くあり、大変有意義な研修であった。来年度以降も積極的な姿勢で研修を受けていきたい。

最後に、本研修を受けるに当たって、管理職の先生方をはじめ、指導教員の佐々木絵里先生、教科指導員の加藤奈保子先生、各主任の先生方からご協力をいただいた。心から感謝申し上げるとともに、さらに自己研鑽に努めていきたい。一年間ありがとうございました。

令和６年度　講座番号　Ａ－３

「初任者研修講座（高等学校）」を受講して

氏　　名　：　加賀谷　健

研修の目標

教員としての心構えを身につけるとともに、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての基礎的・基本的な指導力を養う。

受講内容

[総合教育センター主催]
・初任者研修講座：教科等指導力、マネジメント能力、生徒指導力、教育課題への対応
[高校教育課主催]
・PA（プロジェクトアドベンチャー）研修：PA 体験、協議
・生徒理解（秋田明徳館高等学校）：生活体験発表会参観、授業参観、秋田明徳館高等学校長講話
・特別支援学校訪問：授業参観、授業体験、教育専門監講話

受講のまとめ

総合教育センター主催の初任者研修講座は、Ⅰ期からⅩ期までの合計 10 回にわたり開催された。この研修では、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくり」「いじめ等の問題行動や不登校の理解」「総合的な探究の時間の充実」など、教員としての基礎的かつ基本的な指導力を養うことができた。特に、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくり」では、生徒が主体的に学びに向かう意欲を引き出し、個別最適な学びを実現する授業を目指して授業実践研修を行った。この研修を通じて、生徒一人ひとりの学びの進度や理解度に応じた指導法について理解を深めることができた。総合教育センターの金岡指導主事や本校の数学科教員から、「全体での効果的な共有の仕方」や「生徒の意見の取り上げ方の工夫」といった具体的かつ実践的な助言を得ることができた。これらの助言を生かし、今後も授業の質を高め、生徒同士の対話を活発化させ、互いに学び合う授業づくりを推進していきたい。

高校教育課主催の研修では、体験的な学びを重視したプログラムが用意され、生徒の実態に応じた実践的指導力を身に付けるとともに、広範な知見を得ることができた。特に PA 研修では、集団づくりにおける信頼関係の構築方法について深く理解することができた。たとえば、課題開始前に行うアイスブレイク活動の工夫や課題終了後に実施する振り返りの時間の重要性を学び、これを授業展開や学級経営に応用する具体的な方策を得ることができた。この研修を通じて、集団づくりにおける信頼関係の構築方法において「集団づくりのプロセスを考慮する」「失敗を許容する安心感を醸成する」「振り返りの機会を重視する」という 3 つの重要なポイントを学ぶことができた。

本研修を受講するにあたり、管理職の先生方をはじめ、指導教員の佐々木絵里先生や各主任の先生方から多大なる支援と指導をいただいた。心より感謝申し上げるとともに、今後さらに自己研鑽に努め、より良い授業づくりと生徒指導の実現に邁進していく所存である。

2　研究・実践記録

今年度理数科の取組

今年度国際科の取組

研究発表　『宋史』列伝　劉温叟における「温」

国語科　坂本　公正

今年度の理数科の取組

理数科運営委員会　　加藤奈保子

１　はじめに

本校理数科では、科学やテクノロジーの進展と社会の変化に対応できる柔軟な思考力と新しいアイディアを生み出す想像力の育成、探究的な学習活動をとおして、自ら学び、自ら考え、提案できる人材の育成をめざしている。特色としては、理科や数学に興味・関心をもつ生徒に対して、その能力を伸ばすために、観察・実験や探究活動等の実践を含めた発展的な教育を行うことは勿論、県内の大学と連携し、大学教員による授業や探究活動の指導等を通して専門性の深化を図り、将来にわたる学習・研究につながるように工夫を試みている。今年度は、以上の内容を満たすべく、様々な活動に取り組んだ。

２　実践したこと

（１）教科「理数探究」の充実

「理数探究」は、探究の過程を通して、課題を解決するために必要な資質・能力を身につける科目である。生徒自らが課題を設定し、主体的に探究の過程を遂行し、探究の成果について報告書（論文）を作成させるものである。今年度の実施記録を参照していただきたい。

早期のテーマ設定

現二年生は、一年生の冬休みから１月にかけて、理数探究の班分けとテーマ設定を行い、研究のアブストラクトを作成させた。各班で「理数探究計画書」を作成させ、見通しを持って取り組むように指導した。

「理数探究ノート」の活用

目的意識を持って探究活動を行うために、また本時の探究活動を振り返り、それを言語化し意味付ける活動として、毎時間班ごとに話し合って記入させた。具体的には、以下の内容である。

◇授業の始めに（今日の目標、実験または調査する内容の確認、役割分担等）

◇授業中（探究の過程、実験の記録、考察意見等）

◇授業の終わりに（感想、わかったこと、新たな疑問、次の時間に向けてやるべきこと）

探究している内容、観察、実験、調査の方法などの価値について確認させ、「わかったこと」「疑問に感じていること」を認識させた。また、「これはどうなっているのか」といった新たな疑問をノートに書くように指導した。新たに見いだした疑問や解決策を記録することや、校外学習の講義や振り返りを記録することで、探究活動の素材を蓄積することができたと思われる。ノートは担任（理数科主任）がチェックし、コメントを書いて返却した。指導に手間がかかったが、毎時間の目標や実験の記録、振り返り等を記入させることで、目的意識と見通しを持たせることができた。また、研究の進捗状況、生徒が今困っていること、班内でのトラブルも含めて実態を把握することができた。指導の面でも有効な取り組みであった。

令和６年度　由利高校理数科　理数探究実施記録

学期	月	日	曜日	理数物理・生物 5校時	理数探究 6校時	理数探究 7校時	時間数	備考
前期	4	11	木	授業	オリエンテーション→班ごとに活動	アブストラクトの確認　研究テーマ見直しと理数探究計画書の作成	2	オリエンテーション会場は２D教室
		18	木	授業	調査と研究	調査と研究　理数探究計画書を提出	2	
	5	2	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	
		9	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	
		16	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	
		23	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	
		30	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	中間発表会の発表形式を提示
	6	6	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	
		20	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	
	7	4	木	授業	中間発表会の準備	中間発表会の準備	2	
		11	木	授業	中間発表会の準備	中間発表会の準備	2	
		18	木	授業	中間発表会　発表5分		2	夏期補習3日目：アドバイスシートの集計と振り返り、今後の計画、論文の様式を提示、県立大学アドバイザー教員に研究経過と中間報告の振り返り、今後の方向性と質問事項を送る
	8	22	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	県立大アドバイザー教員からのアドバイスを受け、9月4日の博士号教員の指導に備える
	9	3～5	火水木	サイエンスプログラム			21	2日目に博士号教員3名に指導していただく
		12	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	
		19	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	
	前期合計						51	
後期	10	3	木	授業	調査と研究	調査と研究	2	
		17	木	授業	校内発表会の準備	校内発表会の準備	2	論文の様式を提示
		24	木	授業	校内発表会　発表10分		2	
		31	木	授業	校内発表会の振り返り	課題研究発表会・理数科合同研修会の準備	2	アドバイスシートの集計と振り返り、課題研究発表会、理数科合同研修会に向けた修正
	11	14	木	課題研究発表会（カダーレ）			4	４～７理数探究扱い
		18	月	理数科合同研修会（秋田県総合教育センター）			7	
		19	火	理数科合同研修会（オンライン開催）			7	
		21	木	授業	論文作成	論文作成	2	
		28	木	授業	論文作成	論文作成	2	論文完成
	12	12	木	高大連携授業①知能メカトロニクス学科　小谷　光司　教授			3	一年生理数科進学予定者も参加
		19	木	高大連携授業②情報工学科　光澤　敦　教授			3	
	1	16	木	授業	木５授業	進路研究	1	
		23	木	授業	木５授業	進路研究	1	
		30	木	高大連携授業③建築環境システム学科　板垣　直之　教授			3	
	2	6	木	高大連携授業④経営システム工学科　金澤　伸浩　准教授			3	
		13	木	高大連携授業⑤機械工学科　尾藤　輝夫　教授			3	
	後期合計						47	
年間合計							98	

③探究の過程を遂行する力の育成

探究の意義・過程、研究倫理、観察実験調査等の技能、事象を分析するための技能、探究の成果をまとめ発表するための技能、数学的・科学的な手法を習得させた。具体的には以下の内容である。

◇理数探究オリエンテーション（理数探究の意義と概要の説明・「理数探究計画書」の作成）

◇秋田県立大学教員による指導（班ごとに学習アドバイザー教員の配置）

◇秋田県博士号教員による講義と理数探究の指導（サイエンスプログラムにて実施、詳細は後述）

◇中間発表会、校内発表会の事前と事後の指導（ピアレビュー、プレゼンテーション、アドバイスシート等。詳細は後述）

◇秋田県立大学教員による高大連携授業（12月～2月に5回実施、詳細は後述）

（２）サイエンスプログラムの実施

令和６年９月３日（火）～９月５日（木）の３日間に渡って実施した。

１日目　大学から学ぶ

初日は、秋田県立大学の施設見学と実験講習を実施した。大学の見学や講義を通して最先端の技術や研究に触れることで、理数系の分野に関する知識・理解を深め、学問への視野を広げ進路意識の向上を図ることを目的とした。今年度は、理科の科目選択別（物理／生物）に本荘キャンパスと秋田キャンパスに分かれて実施した。秋田キャンパス班（生物資源学部）では、学部学科紹介、施設見学、応用生物科学科の岩下淳先生による模擬講義が行われた。また、ビデオによる由利高校卒業生や学生生活等の紹介もあり、大学をより身近に感じる機会となった。本荘キャンパス班（システム科学技術学部）では、知能メカトロニクス学科准教授の伊東良太先生から「光のいろいろ中級編－光を制御して色を変えるー」というテーマの実験講習に参加した。2枚の偏光板に屈折率が1つではない材料を入れると角度によって色が変わる現象（複屈折）の実験と規則性を定量化する内容であった。生徒は自主的に条件を変えて実験を行い、積極的に取り組んでいた。その後、由利高校の卒業生２名との懇談会を行った。生徒の感想によると、「志望校を確定した時期や受験勉強を始めた時期、今やっておくべきことなど先輩にしか聞けない話ができ、進路実現に繋がるとても良い経験をさせていただいた」とのことである。

２日目　手法を学ぶ

博士号教員の須田宏先生（横手清陵学院高校）、大沼克彦先生（大曲農業高校）、杉本裕司先生（大館鳳鳴高校）に来校していただき、ご自身の研究分野の紹介と理数探究についての講義と、各班の研究に対する指導をお願いした。普段聴くことができない高い専門性に裏付けられた知的世界に触れる機会となった。生徒の自然科学に対する関心や意欲が向上したと思われる。講義の内容から共通していたのは、探究を進めていくにあたって「コミュニケーション能力」「信頼性」「他者から意見を素直に聞き入れる素直さ」が必要である、ということである。終了後、生徒は博士号教員の先生方に、探究で困っていることや解らないことを質問し、この先どう進めていけば良いのかなどを確立することができ、探究活動が大きく動いたように感じたようである。併せて「現時点の自分たちには足りないことばかりだ」と感じた生徒もいた。また、データの考察、検証方法等について、具体的なアドバイスをいただくことができた。

３日目　地域から学ぶ

由利本荘地区の地の利を生かした学習活動を展開することを目的として、白瀬南極探検隊記念館・鳥海山・飛島ジオパーク・ＴＤＫ歴史みらい館にてフィールドワーク体験活動を行った。白瀬南極探検隊記念館では、にかほ市出身の白瀬矗と南極探検隊のあゆみを学んだ。生徒は、探検に使用した開南丸を復元した船に乗ったり、昭和43年に日本人として初めて南極点に到達した雪上車に乗り込んだりして、南極探検の気分を満喫していた。また、オーロラの映像を見ながらオーロラの発生原理について学び、南極の氷や隕石に触れる体験を通して、極地の自然科学に興味を持ったようである。次に、鳥海山・飛島ジオパークである奈曽の白滝・金峰神社・元滝伏流水を見学した。ジオパークガイドの方に案内していただいた。滝までの道のりは険しく、進むのが大変であったが、到着した伏流水からマイナスイオンをたくさん感じたようである。また、ジオパークガイドの説明を聞いて、ジオ（地球）に関わる自然遺産の成り立ちを体感することができた。最後に、ＴＤＫ歴史みらい館を見学した。にかほ市と関係が深いＴＤＫの企業紹介と過去の歴史、電子機器の進化の歴史と未来のテクノロジーをＴＤＫ独自の技術を映像や体感デモを通して感じることができた。これから訪れる未来社会をどのように創っていくのかを考える機会となった。

元滝伏流水にて

ＴＤＫ歴史みらい館

（３）秋田県立大学との連携

アドバイザー教員の配置

理数探究の各班に県立大学からアドバイザー教員を配置していただき、研究の相談やサポートをしていただいた。各班の担当教諭を介して、生徒から疑問点や研究の方向性についてアドバイスをいただくことができた。また、研究に必要な実験器具（静電気測定装置）を県立大学からお借りすることができた。

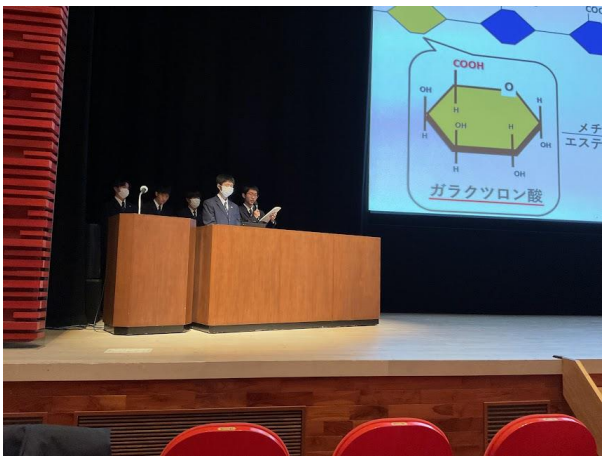
高大連携授業

12月から2月にかけて、秋田県立大学教員による高大連携授業を5回実施した。科学分野に関する幅広い知識を身に付け、将来の進路選択に役立たせることを目的として、システム技術科学部の5学科の授業を受講し、科学分野に関する幅広い知識を身に付けることができた。事前学習として、担当の先生から調べ学習等の課題を提示していただいた。また、来年度理数科進級予定の1年生も12月12日のみ参加した。生徒は、高校の教科との関連性を意識しつつ、学問の面白さを実感できたようだ。来年度も継続したい。

実施日	担当学科・担当者
令和６年１２月１２日（木）	知能メカトロニクス学科　小谷　光司　教授 「コンピュータの動作原理を理解しよう！」
令和６年１２月１９日（木）	情報工学科　光澤　敦　教授 「コンピュータセキュリティ最新技術」
令和７年　１月３０日（木）	建築環境システム学科　板垣　直行　教授 「秋田スギを有効活用するための建築部材の開発」
令和７年　２月　６日（木）	経営システム工学科　金澤　伸浩　准教授 「リスクで考える」
令和７年　２月１３日（木）	機械工学科　尾藤　輝夫　教授 「金属を知るための簡単な実験」

（４）校内発表会・課題研究発表会(11/14)・秋田県理数科合同研修会(11/18,19)

校内発表会、課題研究発表会、秋田県理数科合同研修会の発表を通して、探究の成果を新たな視点で分析・調整する過程を通して、思考力・表現技能を高め、発信力を鍛えることができた。今年度は、事前と事後の指導を重点的に行った。アドバイスシートを各班で分析させ、今後の取組について検討させた。



事前指導

(1) ピアレビューとは何か、注意点、チェック事項について＜資料１＞

(2) プレゼンテーションとは何か、目的、効果的なプレゼンテーションの方法、効果的なプレゼンテーションの準備の方法について＜資料２＞

事後指導

(1) 生徒が記入したアドバイスシートを、各班の指導担当教員に配付

(2) アドバイスシートの評価や助言を基に、問題点や今後の研究の方向性について検証

(3)「理数探究ノート」に発表の振り返りを記録

秋田県理数科合同研修会では、県内の理数科がある高校（大館鳳鳴・能代・秋田・横手・湯沢）が一堂に会し、分科会に分かれて発表した。質疑応答では、他校の生徒から自分たちが気づいていなかった点を指摘されたり質問されたりしたが、班のメンバーと話し合い、質問者を納得させるような回答を考え、説明していた。他校の生徒の前での発表は、どのような質問が来るのか不安と緊張が伴ったと思われるが、しっかりとやり遂げていた。発表の機会を重ねるごとに、研究の深まりと自信、成長が見られた。

３　次年度に向けて

理数探究については、年間を通して、計画的に進めることができた。しかし、生徒のテーマに対する練り上げが全体的に不十分であったため、研究に行き詰まる場面が多く見られた。データの処理や分析においても、統計的な根拠が薄かったことは否めない。

次年度に向けて、テーマ設定を早期（1年生の後期）に行い、専門的な見地から具体的な研究の手法と方向性を見いだせるような指導が必要である。また、データ分析における統計的な手法の学習（Ｐ検定、帰無仮説等）を早期に実施する必要がある。

今年度の理数探究のテーマとして、由利高原鉄道に関する研究や、地元産のフルーツの変色や酵母に関する研究が行われた。身近な地域について改めて学び、地域の資源に対して学術分野の対象として目を向ける機会となった。次年度も継続した研究をお願いしたい。

「サイエンスプログラム」については、今年度新たに計画したが、三日間を通して理数科における地の利を生かした新たな学びを得ることができた。次年度は、更に地域とのつながりに重きを置いたプログラムを検討したい。

＜資料１＞ ピアレビュー

●ピアレビューとは

・ピアレビューとは、仲間や同僚を意味する「ピア（Peer）」が、経験やノウハウを活用しながら、改善策の検討・提案、評価、すなわち「レビュー（Review）」しあう活動を意味します。

・大学では、学生同士でペアを組んだり、グループ内で回し読みをしたりするかたちで、お互いにレポートや論文を読み合い、コメントする機会があります。

・科学の場では、ピアレビューは重要な過程です。自分が書いた論文を掲載しようと学術雑誌に投稿した場合、学術論文としてふさわしい内容かどうか、正当に判断するための審査（レビュー）が行われます。この場合、「ピア」は、同僚すなわち、自分と同じ専門家を意味します。

・また、論文に限らず、研究費の申請書類の審査なども同様に行われます。

・どのような学術分野においても、このような研究者同士の相互審査が行われています。

●学生同士のピアレビュー

・ピアレビューの過程を通して、自分の文章を客観的に見ることができ、どこを手直しすればいいのかわかるようになります。

・他の学生が書いたレポートを検討することで、自分自身の文章作成スキルの向上にもつながります。

・ピアレビューを通して、自分の考えを客観的に評価することができ、批判的思考が鍛えられます。

・多くの場合、教員やTA（学部学生等に対するチュータリング（助言）や実験・演習等の教育補助業務を行う学部生または大学院生）から助言やアドバイスを得ながら、ピアレビューは繰り返し行われます。このサイクルを繰り返すことにより、論文の完成度を高めていきます。

●ピアレビューを行う上で注意すること

・まず良い点を指摘しましょう。（相手のことを思いやる）

・コメントする際には、必ず建設的な意見を述べるように注意しましょう。

（改善すべき点を指摘するだけでなくどのように改善すればよりよくなると思うのかまで述べること）

・人格否定にならないように配慮しましょう。

（指摘は発表内容に対して行うのであって、相手の人格を否定してはならない）

（レビューされる側も、指摘されているのは発表内容をよりよくするためであり、自分の人格に対するものではないと理解しておくこと）

・指摘はできるだけ具体的に行いましょう。

（抽象的で漠然とした指摘では、何が問題でどのように改善したらよいかわかりません）

●ピアレビューでチェックする事項

・構成は論理的であるか。

・論理の飛躍はないか。

・結論を裏付けるデータや引用はあるか。

・文献の引用は正確か。

・冗長な記述（説明）はないか。

・誤った記述はないか。

・文章は一義的（意味が一つに限られており、誤解の余地がない）か。

・指定された書式（様式）に合っているか。

・誤字、脱字はないか。

・表記は統一されているか。

・図表と本文は一致しているか。

・結論が論理的に導かれているか。

・目的と結論の対応はとれているか。

まとめ
・ピアレビューとは、仲間や同僚が、経験やノウハウを活用しながら改善策の検討・提案・評価しあう活動のこと
・ピアレビューの注意点は、よい点も指摘すること、建設的な意見を述べること、人格否定にならないように配慮すること、指摘を具体的に行うこと
・ピアレビューでのチェック事項は、結論が論理的に導かれているか、結論を裏付けるデータや引用があるか、文献の引用は正確か、構成は論理的であるかなどである
・ピアレビューの意義は、学術的に正当な評価をすること、科学研究の信頼性を立証すること

＜資料２＞プレゼンテーション

● プレゼンテーションとは

・プレゼンテーションとは、ある対象についての情報を他者に伝えることであり、口頭説明を基本に、資料やデータを示しながら、聴衆の理解を求めることです。

・今まで皆さんが経験してきたプレゼンテーションとしては、自己紹介もその一例といえます。また、授業の一環として、自分が行った課題を発表することもプレゼンテーションです。さらに今後、学術分野では大学や研究所、学会内の研究発表をするときに、また一般企業でも商品の企画や説明をするときに、プレゼンテーションを行います。これから皆さんのプレゼンテーションの機会は、もっと増えていくでしょう。

・学術的なプレゼンテーションには、主にポスター発表と口頭発表の２つの形があります。

【ポスター発表】自分の考えや成果をポスターにまとめて掲示し、少人数の聴衆に直接説明したり、議論したりするスタイルです。興味をもってくれた人と自由に議論を深めることができる一方で、多くの人に自分の研究の成果を知ってもらうのは難しいといえます。

【口頭発表】会場の聴衆の前で、講演形式で成果を発表するスタイルです。一度に多くの人に自分の成果をアピールできますが、時間制限があるために聴衆との間で議論を深めることは難しい場合があります。

● **プレゼンテーションの目的**

① **聴衆に自分の考えを理解してもらう**ことができる

② **自分の考えを論理的に構成し、明確に分かりやすくまとめる**ことができる

③ **聴衆から意見をもらう**ことができそれらの意見をもとに、**さらに自分の考えを分かりやすくしたり、新しいアイディアを構築**したりすることが期待できる

● **効果的なプレゼンテーションの方法**

聴衆を思いやり、聴衆の立場になって、どうすれば相手に伝わるのかということを念頭において工夫することが重要！

【内容面】

① **研究成果のエッセンスに絞ってわかりやすく伝える**

対象に応じて**予備知識が異なる**ため、**どのような導入**を準備するのか、**どのような用語**を使うのかが適切かなど、**配慮**する必要があります。

② **先行研究の内容と自分の研究の内容とを区別する**

どこまでか先行研究で明らかにされている内容で、どこからが自分の研究で明らかにしたことなのかを明確にする必要があります。先行研究を紹介する際には、プレゼンテーションにおいても文献を示すようにしましょう。

【形式面】

③ **背筋を伸ばして明瞭に話す**

内容面を工夫しても、発表の形式（デリバリー・スキル：振り手振り、声のトーン、間の取り方など）が上手くないと、自分の主張の根幹となる部分を聴衆に正確に理解してもらうことが難しくなります。まずは、基本的な点ですが、背筋をしっかりと伸ばして明瞭に話すように意識しましょう。

④ **聴衆とアイコンタクトをとって話す**

聴衆とアイコンタクトをとって話すと、自分の発表に対する**聴衆の関心を持続**させることができます。さらに、聴衆の反応がわかるため、理解できていないようなときには補足の説明を加えるなど臨機応変に対応することができます。

⑤ **重要な部分を強調して話したり問いかけを入れたりする**

発表時間が長い場合には、聴衆の集中力が途切れてしまうときがあります。重要な部分を強調して話すなど抑揚をつけることで、自**分の研究の重要な部分を話す際に聴衆の集中力が高まっている状態**を目指しましょう。一方的に話し続けるのではなく、時折問いかけを入れて、聴衆に考えてもらう時間を短くも受けることも効果的です。

⑥ **資料を見やすいものにする**

映写したり配布したりする資料をみやすくする工夫も必要です。特に、スライドの場合には**文字を詰め込みすぎない**ようにしましょう、せっかく重要なことが書いてあっても、見づらい資料では聴衆の読

む気が失せてしまいます。**箇条書き**にしたり**図表**を用いたりして、視覚的にもわかりやすいプレゼンテーションを目指しましょう。

● 効果的なプレゼンテーションのための準備の方法

① どこで、誰に、どのくらいの時間話すのかを把握しましょう。決められた時間内に、自分の意見を過不足なく伝えるためには、構成と時間配分をあらかじめよく練っておきましょう。

② 何を伝えたいのかを明確にしましょう。研究成果のエッセンスに絞ってわかりやすく伝えることで、自分の主張の根幹となる部分を聴衆に正確に理解してもらうことが大切です。

③ 構成を考えましょう。聴衆の立場になって吟味することが重要です。発表には制限時間がありますから、無理に詰め込まず、**優先順位をつけて特に重要なものに絞った内容**にしましょう。なお、取捨選択の過程で発表から外したものも質疑応答の際に使えることがありますので、予備資料としてとっておくと便利です。

④ 発表材料（実験結果のグラフなど）をそろえましょう。

プレゼンテーション用のソフトウェアを用いることで、一貫性のある美しいデザインのスライドを簡単に準備することができます。さらに、アニメーション効果などを使うことで聴衆の目をひくようなプレゼンテーションを行うことも可能です。しかし、アニメーション効果などを過度に使うと、聴衆が発表の中身に集中できなくなってしまいます。美しく表現することにより聴衆を引きつけることも重要ですが、**自分が伝えたいことを十分に伝えられるかということがもっとも重要**であることを忘れないように。

⑤ リハーサルをしましょう。

準備が一通りできたら、事前にリハーサルを行いましょう。その際、誰かにリハーサルを見てもらい、第三者の視点からよい点と問題点の双方を指摘してもらうと、さらなる改善につなげることができます。リハーサルを見てもらう人には**忌憚なく建設的な意見**を寄せてほしいとお願いしましょう。プレゼンテーションが成功するかは、どれだけ念入りに準備をしたかにかかっています。問題点が発見されたら、その問題点に相当する手順まで戻って改善し、リハーサルまでの流れを繰り返すようにしましょう。

本番まで落ち着いて発表に専念できるように、プレゼンテーション ソフトウェアでのスライド送りの操作や、レーザーポインターの使い方、プロジェクターとの接続にも慣れておきましょう。また、話し方や聴衆へのアイコンタクトについても、上手にできるようになるまで繰り返し練習することが大切です。**リハーサルと改善を繰り返すことを厭わない**ようにしましょう。

今年度国際科の取組

国際科運営委員会
笹　渕　夏　子

昨年度から今年に引き続き、本校は「AKITA グローバル人材育成事業」の指定校４校のうちの一つになり、様々な教育活動を実施した。昨年度より再開された台湾への修学旅行や９月に行われたグローバルチャレンジなど従来の取組を継続しながらも、大学教員や地域の人材による授業・講演、ワークショップ等の活動をより積極的に実施し、国際社会への視野を広げ、進路実現にも活かすことをねらいとした。また中国甘粛省青少年代表団や由利本荘市の姉妹としてあるハンガリー・ヴァーツ市青少年友好交流訪問団との対面での国際交流活動を実施することができ、生徒たちに様々な文化背景の人たちとの繋がりをより身近に感じられる機会となった。

１．オンライン形式の講座・交流活動について

今年度はオンライン形式での講座や交流活動を活用し、JICA 派遣社会人による講話や同世代の若者との交流活動を設定した。

（１）JICA オンライン特別講座

○７月１１日　榎本未希氏（職種：経営管理、赴任国：ネパール）２年生国際科生徒対象
○７月１６日　五十嵐貴昭氏（職種：農村部における水衛生の改善、赴任国：ルワンダ）１年生対象

それぞれの講師に、自身のキャリア選択や生き方、現地での生活や人々との関わり、異文化理解や様々な人々との共生等のテーマについて講義していただき、生徒が自分自身の生き方や進路選択について考えることができた。

【生徒の感想】

・ルワンダ共和国の話を聞いたり動画を見たりして、実際の現状や困っていることをたくさんの人が共有・理解することが大事だと思った。たとえ小さくても、自分にできることを行動に移すことが国際協力へと繋がる第一歩になると信じて自分の行動に自信を持って、いろいろな活動にチャレンジしたい。

・学生のうちにたくさんの経験や挑戦をすることで、自分の将来が見えたり将来の仕事に結びついたりすることが分かった。高校生活の中で、興味のあることにどんどん挑戦をしていきたい。

・計画力、分析力、継続力の３つが大切だと聞いて、学習においても部活においてもこの３つは結果を出すためにとても大切だと私自身もあらためて思った。進路実現のため、この３つ、そしてチャレンジすることを忘れないようにしたい。

（２）オンラインでの国際交流活動

○８月２２日　JENESYS2024 日 ASEAN 高校生オンライン交流
国際科３年生と１年生の希望者を対象に実施
○１２月１１日～１６日 With The World オンライン国際交流体験プログラム
交流国　インドネシア・フィリピン・バングラデッシュ・ミャンマー・アフガニスタン・ルーマニア等
１年生全クラスで実施

オンラインでは、直接同じ空間でやりとりできないため、本当に自分の言ったことが相手に聞こえてい

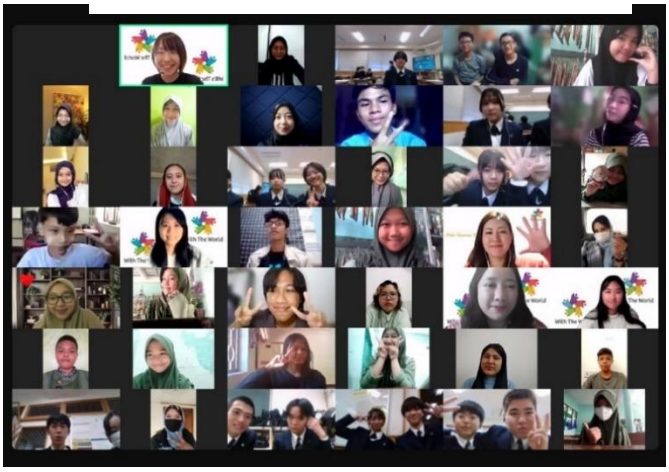
るのか、相手が自分の話に興味を持っているのかなどの点について対面のときよりも伝わりにくいと言われている。そこで、普段よりも大きなリアクションをとる必要性を事前に指導し、文化の異なる相手の立場に立ってオンライン交流活動に取り組むよう指導した。各自の名前を、それぞれの母語の文字で書いてもらい名前の由来やニックネームを教えてもらったり、お互いの国・地域のおすすめの観光地・食べものや特産品・流行しているものを紹介したりする活動を通じて、自分から積極的に英語を話し伝えようとすることや相手の話に相づちやジェスチャーで反応するコミュニケーションスキルの上達を促した。

カバンの中に入っているもの何か１つ見せて！

日本では〇〇ですが、あなたの国ではどうですか

自分たちの住む地域について紹介

キーワードから連想するもの３つを挙げて！



ハイ、チーズ！

２．対面での国際交流活動

○７月１８日　中国甘粛省青少年代表団との交流
○７月２９日　ヴァーツ市青少年友好交流訪問団との交流
○１１月５日　台北市私立大同高級中学との交流

今年度の大きな成果として、台湾への修学旅行の際の現地校との交流に加えて由利高校での対面の国際交流活動が挙げられる。中国甘粛省青少年代表団やヴァーツ市青少年友好交流訪問団との交流では、茶道部・書道部・民謡部の生徒たちの協力を得て、日本文化体験ツアーを含む交流活動を実施することができた。教師を介さずほぼ同世代の海外の生徒と英語や中国語を活用してコミュニケーションをとることで、生徒たちの外国語学習や異文化理解に対するモチベーションが高まった。

【生徒の感想】

・英語でコミュニケーションを図ったとき、中国の人たちの発音がきれいで驚いた。自分の言いたいことを伝えるのはなかなか難しかったけれど、伝わったときは嬉しかった。言葉の壁はあったけど、互いに文化などについて認め尊重し合って、楽しい思い出を作ることができた。

・書道体験の時に、筆の持ち方や書き方を説明しようとしたが、言葉が上手く出てこなかった。事前にどんな単語を使えばいいかなど、事前にもっと準備しておけば良かった。

・今回の交流活動では、スマホの翻訳機能に頼ってしまう部分があった。次の交流活動の時は、なるべくスマホを使わないで自分で考えた英語でいろんなことを伝えたいと思った。

・学校の規模が大きすぎてびっくりした。校内でウェディング写真も撮っていたのが非日常で面白かった。グループ外の人と交流する時、向こうの方から話しかけてくれたので有難かった。グループの人と共通の話題があったので嬉しかった。中国語では聞き取れなかったけど英語だと理解出来たので、英語は偉大だなと感じた。

・積極的に色んな人に英語で話しかけることが出来て良かった。できるだけ翻訳アプリを使わずに話すことを心がけた。英語でも聞き取りにくい所や伝わりにくいところがあったからリスニング力やスピーキング力を上げたい。

積極的に質問してみよう！

大黒様を英語で説明すると・・・

“アダム”を漢字で書いてみよう！

初めてのお茶と和菓子の味は？

みんなで記念写真！

３．由利高グローバルチャレンジ

〇1 日目　９月３日

・石井宏典氏（株式会社 141&Co.（ワンフォーワン・アンド・コー）代表取締役）による、キャリア選択や生き方・秋田の課題と人口減少問題への取り組みに関する講演（1 年生も聴講）

〇2 日目　９月４日

・ケニア、インド、マレーシア、マダガスカルなどアジア、太平洋、アフリカ出身の秋田大学留学生との異文化交流プログラム。Interview &Presentation や Small Discussion など

〇3 日目　９月５日

・秋田大学キャンパスツアーと模擬授業

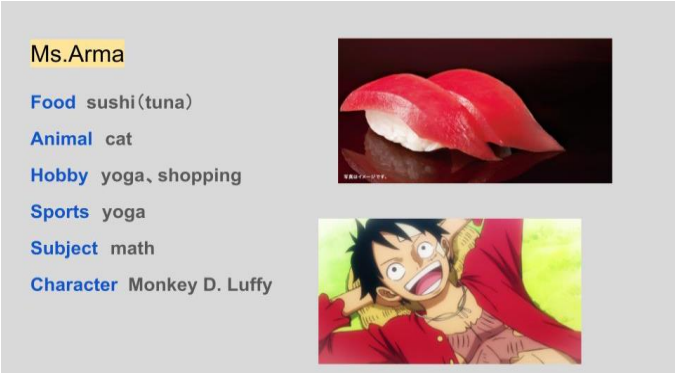
主に国際科２年生を対象に、９月３日（火）から５日（木）までの３日間にわたって行われた。今年度は大学見学等も実施し、校内外での活動を設定した。秋田大学留学生を招いての異文化交流プログラムでは、アジアやアフリカを含め幅広い出身国の留学生と交流し、多様なアクセントを含む英語を経験することができた。外国語・異文化理解学習のロールモデルとなる留学生の姿から、生徒たちは大いに刺激を受けるとともに、グループでのアクティビティを通じて他者と協働することや間違いを恐れず、自分の意見を明確に述べることの重要性を学んだ。

【生徒の感想】

・模擬授業が面白くて、大学生に近づけた気がした。いま勉強を頑張って、楽しい大学生活を送りたいと思った。自分の知らない分野について調べてみるのも、いろいろな発見があって面白そうだ。

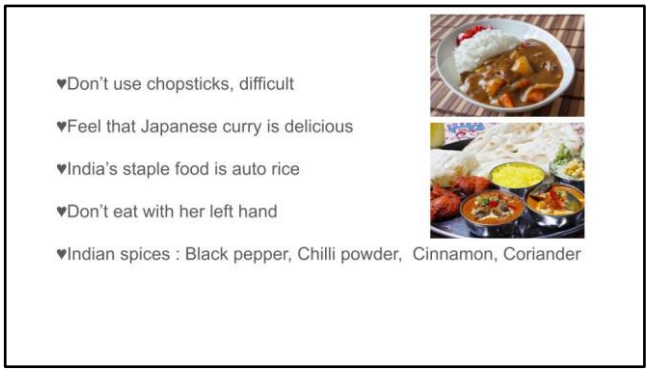
・国際資源学科では、資源学しか学べないと思っていたが英語教育にも力を入れていて驚いた。フィールドワークで他国の文化に触れてることで、視野が広がり自分の価値観が変わるのではないかと考えた。

留学生にインタビューして情報を聞き出そう

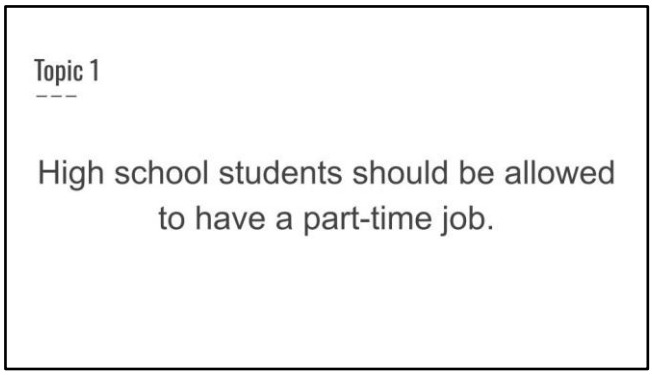


留学生についてみんなに紹介

・興味のある、なしに関わらずオープンキャンパスに行った方がいい理由が分かった。どの学部でも英語に力を入れていて、海外のことについて学ぶためには日本の文化もしっかり理解することが大切だと分かった。大学の模擬授業は集中しやすい環境で、時間を忘れるくらい真剣に取り組むことができた。
・国際資源学部の先生の模擬授業を受けてみて、大学生が普段どのような感じで授業を受けているのかしることができた。また講義は普段は英語で行っていると聞いて驚いた。秋田大学は私の志望校の１つなので、今日学んだことを進路選びに役立てたい。



左手で食事はしないんだね！



自分の意見を、根拠を持って述べられるかな？

４．社会人特別授業

○６月１８日　東風平蒔人氏（角館「茅葺の曲がり家西の家」経営）１年生、国際科２・３年生対象
○９月　３日　石井宏典氏（株式会社 141&Co.（ワンフォーワン・アンド・コー）代表取締役）
１年生、国際科２年生対象
○１０月２９日　藤本悠里子氏（アーツセンターあきた）和田拓也氏（株式会社アウトクロップ）
１年生対象

今年度は、グローバルチャレンジ期間中に実施した石井宏典氏のワークショップを含め３回の社会人特別授業を実施した。少子高齢化や事業継承など地域の抱える課題について理解と深め、これからの地域資源の活用や自分が地域のためにできることを考えることをねらいとした。様々な人や企業が秋田のために取り組んでいる活動について学び、地域への貢献やキャリア選択について学びを得ることができた。

【生徒の感想】
・県外から秋田に来てくださった東風平さんならではの視点や考え方を聞けて、刺激になった。
・わたしは観光の仕事に興味があるので、面白かったです。観光も AI によって仕事がなくなるんじゃないかと思っていたけど今回の講話を聞いて、AI にはできない地元をよく知った人間にしかできない観光案内があるんだと分かりました。
・自分で企業をして理想の会社を作るということを今まで考えたことがなかったので、石井さんの行動力に驚いた。起業することはそんなに簡単ではないかもしれないけど、理想の職場を自分で作ることが生きがいに繋がり、楽しく仕事が続けられる可能性が広がると考えると、やってみたいとも思った。
・自分の will / can / need をしっかり考えて、自分の使命や、生きがい・やりがいを見失わずに生きていけるようにしたい。そのため、社会に出るまでにもっと自分自身のことや自分のやりたいことについて考え続けていきたい。
・秋田で起業するのは若い人も少ないし、難しいと思っていたけれど、石井さんのように企業をサポートしてくれる会社があると初めて知りました。秋田のためではなく、自分のためにやっていることが秋田の

ためにもなるというのが本当に理想の生き方だなと思いました。自分の進路実現のために、よく考えて will, can, need のつながりを見つけたいと思います。
・私は ikigai チャートをすぐに埋めることができませんでした。これからしっかり考えて、埋められるようになりたいと思います。私は将来の夢がまだ決まっていないのですが、自分の視野を広げて何か町のためになることをしてみたいです。
・ひとやまちに何かを与えられるような大人になりたいと思いました。
・プロジェクトを成功させるためには、人と協働することや何かを追求することを楽しめることが必要だと分かった。
・今まで知らなかった職業で、こんな仕事もあるんだと思った。講師の方々は所属している会社は違うけど、地域の人々を楽しませたり地域の魅力を発信したりしている点は共通していて、お話を聞いて地域貢献することの魅力を感じたし、仕事についての視野が広がった。
・自分が他の人になりきってイベントに関わるということを考えたことがなくて、ワークショップを通して新しい視点で物事を見ることができた。

地域で頑張る若い人を、大人は全力で応援するよ！

もし羽後本荘駅前で新しいお祭りがあったら？

５．高大連携授業

○９月１０日	「異文化理解について」	秋田大学　畠山　研先生
○１１月１９日	「外国語学習の意義と効率的な学習法」	秋田大学　若有　保彦先生
○１２月１０日	「AI 時代に必要な英語力とは？」	秋田県立大学　岡崎　弘信先生
○１２月１７日	「2E の概念、障害がある人々、その家族と指導者が教えてくれたこと」	秋田県立大学　坂本　美恵子先生
○１月２１日	「クイズに挑戦！ヨーロッパの民俗文化について知っていますか？」	秋田県立大学　カルロッタ・アヴァンツィ先生

今年度の高大連携授業は、2 年生を対象に３回（秋田大学での模擬授業を含む）、来年度国際科選択者の１年生を対象に３回実施した。大学教員による様々な視点からの学習指導を通して、異なる文化や意見を受容することの大切さや、外国語学習を通して自らの視野を広げていくことについて学んだ。
【生徒の感想】
・人種に優劣はないと分かっているつもりでも、ふとした時に頭で「古い」考えをしてしまっているときがある。自分も知識や考えをアップデートすることを意識し、発言するときも言葉を慎重に選びたい。
・知識が古いままだと、ハラスメントが発生する可能性があると学びました。違いに気づいたら修正する

ことが重要になると思いました。
・ジェンダーに関する問題では、なぜ同性愛者ではない人たちが同性愛者をみとめてあげるという上からなのが理解できないです。ジェンダーについて世の中意識しすぎているし、干渉しすぎだと思っています。
・私たち一人一人がクリティカルシンキングのスキルを身につけ、異文化理解への興味をもち、この世界を変えていく必要があると思います。
・AI に頼りきるのではなく、自分自身の単語力や語学力そのものをアップさせることでより正確な情報を取得し、AI をさらに便利に活用できると思いました。
・通訳の存在が必要かどうかを考えさせられた。私自身は「橋・箸・端」のように人間にしか分からないことや、人と人がやりとりする時には必ず人間の感情が存在するので、人間の通訳という仕事は必要だと思う。
・語彙力がないと相手に伝えたいことが伝わらなかったり、AI の出した間違いにきづけなかったりするので、今から単語をたくさん覚えられるように努力してコミュニケーション能力と英語力を高めたい。
・今回の授業で２E という言葉を初めて知った。私も障害のある方々に対して消極的なイメージを持っていたので、この２E の概念はとても新鮮に感じた。紹介された人々のことを聞いて、障害のある人自身の才能や努力はもちろん、家族や療育のアドバイスをくれる先生たちの接する態度や相手を尊重する気持ちが大事なのだなと思った。
・坂本先生と同じように、私も言語や外国語に今は興味があるけどこれから別のカテゴリーに興味がわくかもしれないし、坂本先生のように障害をもっている人たちについて知りたいと思うかもしれない。これからの生活・将来が楽しみになった。

2E-TWICE EXCEPTIONAL ってどういうこと？

『宋史』列伝　劉温叟（りゅうおんそう）における「温」

国語科　坂本　公正

はじめに

2018 年 7 月に『宋史』（注１）列伝の読解を始めてから 8 年目に入る。今年度（2024）は巻 262 の 18 人を読了した。この中には欧陽脩や王安石といった世界史の教科書にも登場する人物こそいないが、どの人物も五代（注２）にわたる王朝をくぐり抜けるようにして生き抜いた者たちだと言える。この中でも私は特に劉温叟という人物に関心を抱いた。その理由は後述するとしてまずは本稿を進めてみたい。

今年度読了した 18 人

以下に各人物の生没年も含めて挙げてみる。このうち⑫がここで取り上げる人物である。

①李穀（902～960）②咎居潤（907～966）③竇貞固（891～969）④李濤（897～961）⑤弟：澣（?～962）⑥孫：仲容（?～?）⑦王易簡（885～964）⑧趙上交（899～961）⑨張錫（?～961）⑩張鑄（890～963）⑪邊帰讜（907～964）**⑫劉温叟（908～971）**⑬孫：燁（?～?）⑭孫：几（999?～1080?）⑮劉鑄（897～969）⑯邊光範（900～973）⑰劉載（912～983）⑱程羽（912～984）

劉温叟を取り上げた理由

列伝を読み始めた当初、登場人物の印象は荒々しさがあり、時に自らの地位を誇り傲慢な振る舞いをするといったものが目立った。しかしながらかえってそれが特徴となり個性が際だつことにもつながっていた。そこから少し時代が下ると登場する人物の生涯は型や枠にはまったケースが多く見られるようになった。具体的にそれは官職に現れており、例えば、行政面では「知制誥→中書舎人→左右諫議大夫→給仕中」と進むパターンや、御史台では「観察御史」の職に就く者が多いなどである。こうなると人物の行為や言動に注視していかないと誰の列伝を読んでいるのかが分からなくなってしまう。そうした際に「温」という名の下に生涯を送った人物のことが強く印象に残った。この劉温叟がいかなる人生を全うしたのか。それについては次の項に譲ることにする。

温叟の名の由来

劉温叟、字は永齢、河南洛陽の出身である。父方の祖父は唐の昭宗の時（900 年頃）に宰相をつとめ、父の岳は後唐（923～936）で太常卿という官職に至った。温叟は７歳にして文章を作り書も上達したという。父が息子に名を授けるくだりを以下に引用してみる。

◆は原文、■は書き下し文、◇を口語訳とする。

◆岳時退居洛中、語家人曰「吾児風骨秀異、所未知者寿耳。今世難未息、得與老夫皆為温、洛之叟足矣。」故名之温叟。

■岳時に洛中に退居し、家人に語りて曰く「吾が児(こ)風骨秀異にして、未だ知らざる所の者は寿のみ。今世難くして未だ息まず、老夫とともに皆温たるを得れば、洛の叟足らん。」と。故に之を温叟と名づく。

◇父岳が洛陽に退いた時、家族に言ったことには「うちの子は容貌や体つきとも優れており、まだ分からないのは寿命だけである。今の世は（先を見通すのは）難しく、まだ（混乱は）止みそうもない。（だから）年寄りが一緒に皆温かく生きながらえて、洛陽がそうした年寄りで満ちてほしい。」と。そのため「温叟」と名付けた。

ここでは「温」の字に思いを巡らせたい。辞書の第一義的には「あたたかい」であるが、その他に「おだやか」「心がけのやさしい」などがある。果たしてこの人物の人生において「温」がどのように体現されていくのかを次に見ていきたい。

温叟の母の思い

次に挙げたいのが彼の母にまつわる話である。成長した温叟は後晋（936～947）の初めに父と同じ朝廷内の役職に就くことになった。とても名誉なことであったらしく、ここに息子に対面する母が登場してくる。

◆温叟既受命、帰為母寿、候立堂下。須臾聞楽声、両青衣挙箱出庭、奉紫袍、兼衣、母命巻簾見温叟曰「此即爾父在禁中日内庫所賜者。」温叟拝受泣下、退開影堂列祭、以文告之。母感愴累日、不忍見温叟。歳満、加知制誥。

■温叟既に命を受け、帰りて母の寿を為し、堂下に候(ま)ちて立つ。須臾(しゅゆ)にして楽声を聞く、青衣を両つながらにして箱を挙げ庭を出て、紫袍(しほう)、兼衣を奉じて、母命じて簾を巻かしめ温叟を見て曰く「此れ即ち爾の父の禁中に在りし日内庫に賜はる所の者なり。」と。温叟拝受して泣きて下り、退きて影堂の列祭を開き、文を以て之に告ぐ。母感愴して日を累ね、温叟を見るに忍びず。歳満ちて、知制誥に加へらる。

◇温叟はすでに任命を受け取り、帰って母の長寿の祝いをしようと堂の近くで立って待っていた。まもなく音楽が聞こえて母は青色の衣装に袖を通させて箱を取り出し庭に出て、紫のわたいれと重ねた衣を息子に捧げた。母は簾を巻き上げさせて息子を見て言うには「これはおまえの父が皇帝のところに仕えて頃にいただいたものです。」と。温叟は謹んで涙ながらに受け取り（父が）祀ってある堂を開けて文章で報告した。母は(息子の行く末を不安に思い)悼み悲しむ日を重ねるうちに温叟を見るに堪えられなくなった。この歳の暮れに（温叟は）知制誥の官職に就いた。

母の息子をいたわる思いが威厳を保ちつつもよく描写されている。父子それぞれに仕えている王朝は異なるが、政情の不安定さは共通しており、そのことが母の心情に影響していることは容易に推察できよう。ちなみに温叟は後周（950～960）では判国子祭酒という官職を得た。北宋では最後の役職こそ記されていないが、太祖との知遇を得て、良好な関係を築いたようだ。次項ではそのことについて触れたい。

北宋の太祖とのやり取り

職務上の挿話として次のようなものがある。ちなみに北宋の太祖とは趙匡胤のことである。

◆一日晩帰由関前、太祖方與中黄門数人偶登明徳門西関、前騶者潜知之、以白温叟。温叟令伝呼如常過関。翌日請対、具言「人主非時登楼、則近制咸望恩宥、輦下諸軍亦希賞給。臣所以呵導而過者、欲示衆以陛下非時不登楼也。」太祖善之。

■一日の晩関の前より帰りし時、太祖方に中黄門数人と偶（たまたま）明徳門の西関に登る、前驅する者潛かに之を知り、以て温叟に白（もう）す。温叟伝呼して常に関を過ぐるがごとくせしむ。翌日対へて請ひて、具さに言ふ「人主非時に楼に登れば、則ち近制咸（みな）恩宥を望み、輦下（れんか）の諸軍も亦賞給を希はん。臣呵導して過ぐる所以の者は、衆の陛下の非時を以て登楼せざるを示さんと欲するなり。」と。太祖之を善とす。

◇ある日の晩、関所の前から温叟が帰った時に、太祖が中黄門の数人と偶然に明徳門の西の関所を通った。翌日お願いして対面すると詳しく言うには「君主が非常時に楼に登れば、近代の制度では皆駆けつけて特別に罪を軽くすることを求めたり、首都の軍隊らも（出動したことに対して）賞与を求めてくるでしょう。私が荷物を携えてここを通過したのは人民が臣下の非常時にわざわざ楼に押し寄せないようにしようとしたからです。」と。太祖はこれを善いことだとした。

一見何気ない挿話ではあるが、もう少し立ち止まって考えてみたい。創業まもない宋王朝は急ピッチで様々なことに取り組んでいたであろう。その際に見落とした部分も多々あったはずである。そうした折りに「非常事態」への心構えを、しかも相手の体面を損なわずに改善していくやり方こそ温叟らしさが出ていると言えるのではないか。時の権力者に対してこうした対応ができる温叟であるから、推測するに同僚への接し方も同じようにしていたのだろうか。あるいはそこには違った対応があったのだろうか。その点を見極めるために次項に進みたい。

後進を育成する温叟

自身より年下にあたる後進にどう接していたかを挙げてみる。

◆五代以来、言執礼者惟温叟焉。立朝有徳望、精賞鑒、門下中尤器楊徽之、趙鄰幾、後皆為名士。范杲幼時、嘗以文贄温叟、大加称奨、以女妻之。

■五代以来、執礼を言ふ者は惟だ温叟のみ。朝に立ちて徳望有り、賞鑒に精（あ）たりて、門下中尤（もっと）も器なる楊徽之、趙鄰幾、後皆名士と為る。范杲（はんこう）は幼き時、嘗て文を以て温叟に贄（し）し、大いに称奨を加へられ、女を以て之に妻はす。

◇五代の王朝以来、礼を行うことに言及したのは温叟だけであった。朝廷に出仕して徳が高く人望があり、人物の目利きも正確で門下生の中でも最も器である楊徽之、趙鄰幾は後に二人とも名士となった。范杲は　幼少時に以前、温叟に入門して文章を学び、大変評価されて彼の娘を嫁にした。

「賞鑒」とは「人物の目利き」のこと。後輩の面倒見さに加えて人間観察に正しい見識を持っているのだと言う。ここでは「言執礼者惟温叟焉」にある礼を行っていたのは温叟だけであった点に注目したい。先述のとおり混沌とした乱世にあって、温叟のような人間がしかるべき地位についたことは新しい時代の到来を告げる象徴的な出来事であった。北宋の太祖との関係もその一例となろう。人生の後半には人を育てることに注入した温叟であった。

結言　劉温叟という人物を考える

これまで述べてきたことを以下にまとめてみたい。少年時から文才に秀でていた温叟は父母の薫陶のもと他者への思いやりをもって接する立派な成人となる。後晋、後周といった短命王朝の中、役職を歴任しな

がら、特に北宋の太祖とは信頼関係で結ばれていた。また後進の人材育成に非凡な才能を見せた。

結言として、温叟の「温」とは何かに触れたい。単なる親を慈しむ心だけであれば「孝」となろう。だがこの人物の他者への影響力を踏まえた場合、もっと別の表現で言い表せないものだろうか。それは「情」とでも言い換え得るものであろうか。昨今ＡＩが人類の様々な言語、行動に取って変わろうとしている。しかし、ともすればその多くは効率性を追求するものであり、人の心の根底にあるものに届いていないように思われる。現在のＡＩではいわゆる「心の琴線に触れる」的な側面を未来に伝えることは容易ではないだろう。そうした視点をもって劉温叟を眺めた時、この人物が生涯大切にしたであろう「温」から学ぶものは多いと考えている。

注 1『宋史』とは中国二十四史の一つで元王朝の 1345 年に完成。496 巻うち列伝は 255 巻を占めている。

注 2　唐滅亡から北宋成立までの王朝の変遷を示すと次のようになる。

唐滅亡（907）→①後梁（907～923）→②後唐（923～936）→③後晋（936～947）→④後漢（947～950）→⑤後周（950～960）→北宋（960～1127）

参考文献

『宋史』維基文庫　自由的図書館

編　集　後　記

多くの先生方の御協力により令和６年度『研究紀要』を刊行するこができました。原稿依頼がおそくなったにも係わらず、予定通り寄稿していただきありがとうございます。

今年度は個人の研究発表も載せております。普段、研究や研修していることがあれば、今後も載せていきたいと考えております。

年末年始のお忙しい中御寄稿下さいました先生方、さまざまな形で編集に御協力下さいました皆様に、心より御礼申し上げます。

研修部